2025 年 8 月 28 日

私立大学図書館協会 2025 年度海外認定研修 ALA・米国図書館研修参加報告書

大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部図書館
森　惠理子

Ⅰ.はじめに

図書館業界において先進国であるアメリカの各種図書館において、AI やメディアリテラシーの現状および課題について、現地図書館員との意見交換を通じて理解を深め、今後の取り組みに活かすため、本研修の参加に至った。

Ⅱ.研修概要

ツアー参加者：私立大学図書館職員 2 名、一般参加者 1 名、関連企業他 6 名、企画運営スタッフ 3 名、現地スタッフ 2 名（うち 1 名は通訳）による計 14 名の構成。

項目	概要
研修名称	World Library Tour 2025 －ALA・米国図書館研修－
研修期間	2025年6月26日（木）～2025年7月2日（水）
企画協力	丸善雄松堂株式会社海外図書館研修事務局、図書館総合展運営委員会
旅行企画・実施	株式会社 アイ・ダヴリュー・エイ・ツアー
訪問国・州	アメリカ合衆国　ニューヨーク、フィラデルフィア
訪問先	ニューヨーク公共図書館(本館、スタブロス・ニアルコス財団図書館)、ハンターズ・ポイント図書館、ペース大学図書館、アメリカ図書館協会(ALA)年次総会、ペンシルベニア大学図書館、ラトガース大学図書館

Ⅲ.訪問先報告

以下、大学図書館、公共図書館、アメリカ図書館協会（ALA）年次総会の順に報告を行う。

1.ペース大学図書館

2023 年に新たに開館したペース大学図書館にて、館長である Steve 氏より、施設の設計背景、運営上の課題、および今後の方向性について詳細な説明を受けた。

Steve 氏にとって、大都市圏における新設図書館の設計に携わるのは初めての経験であり、多くの学びがあったとのことである。特に、建物の設計段階から関与できたことは、氏にとって大きな挑戦であり、同時に大きな喜びでもあったという。

新館の設計プロセスにおいては、他施設の視察を重ねながら理想的な図書館像を描いていたが、実際には予算や敷地面積の制約により、当初の設計案を大幅に見直す必要に迫られ

た。そうした制約の中でも「学生が勉強したくなる空間づくり」を重視し、景観・採光・静音性に配慮したスペースの整備が行われた。特に、ニューヨーク市街を一望できる大きな窓は、学生の学習意欲向上に寄与している一方で、夜間照明に対する近隣住民からの苦情が発生し、訴訟寸前までの事態に至ったことも報告された。また、蔵書スペースについては、旧館の約 30 万冊から 5 万冊へと大幅に縮小されたことにより、冊子資料の削減は避けられなかった。これに伴い、貸出頻度や学術的有用性を基準として資料の厳選が行われ、一部資料は他キャンパスへ移管された。

一方で、電子資料の利用比率は年々増加しており、現在では図書館の資料提供の中心となっている。しかしながら、電子資料の導入には高コストや利用制限といった課題も多く、他キャンパスとの共有体制の構築や、利用実績に基づいた厳密な選定が求められている状況である。また、コンピュータサイエンス学部があることを踏まえ、AI 技術の活用についても話が及んだ。現時点では大学全体の AI 関連コミュニティに参加し、情報収集は行っているものの、実践的な導入には至っていない。特に、生成 AI の誤情報（ハルシネーション）に対する懸念があり、学生が誤った情報を鵜呑みにする危険性についても言及された。

さらに、一般市民からの寄贈資料を保管しているスペシャルコレクションの紹介もあった。中でも、ヴァージニア・ウルフに関するコレクションは文学史的価値が高く、利用者の関心を集めている重要な資料群である。これらのコレクションについては、学内外の関心を高めるため、展示やイベントの開催を通じた発信に努めているとのことであった。

館内

ヴァージニア・ウルフに関するコレクション

その他のコレクション

2.ペンシルベニア大学図書館

ペンシルベニア大学図書館は、メインライブラリを中心に、学部別に配置された小規模図書館群ならびに貴重書資料を取り扱うスペシャルコレクションエリアなど、複層的な構成を有している。図書館業務の中枢を担うテクニカルサービス部門は、全館で統合されており、資料の収集・整理・保存といった各プロセスが専門スタッフによって効率的に運用されていた点が印象的であった。

また、学内スペースの有効活用を図る目的で、大学から車で約 20 分の距離に位置する資料保管施設「リブラ」が整備されており、約 2 万点の資料が電動書架により厳格に管理されている。

ペンシルベニア大学図書館における特筆すべき特徴の一つは、スペシャルコレクションの充実である。植民地時代の一次資料や、ベンジャミン・フランクリンに関連する品々、シェイクスピア関連資料、美術・宗教に関する貴重書などが整然と保管されており、その規模と質の両面において、世界的にも高水準であると評価されている。

保存方針において特に印象深かったのは、資料の利用目的に応じて修復手法を柔軟に選定している点である。2016 年に設置された「コンサベーションラボ」では、6 名の保存専門家が約 650 万点に及ぶ資料の保存業務に従事しており、全員が保存修復に関する修士号を取得し、専門団体にも所属するなど高い専門性を有していた。作業空間は可動性に富み、多様な保存処理が並行して実施可能な構造となっていた。また、日本製の和紙を用いた修復事例も紹介されており、伝統技術の国際的評価の高さを実感することができた。

資料収集方針については、研究・教育支援の観点から、各分野のライブラリアンが選書権限を持ち、研究動向・学習ニーズ・地域特性などを踏まえた選定が行われていた。とりわけ日本関連資料では、仏教、マンガ、日本文学に加えて、アイヌに関する資料が注目されており、東京・神保町の古書店からの直接購入といった工夫も講じられていた。

電子資料については、分野特性に応じた導入方針が採られており、たとえば中国資料のように将来的なアクセス保証が難しいケースでは紙媒体を優先するなど、持続可能性を重視した選択がなされていた。

教育・研究支援の側面においても、同館は積極的な役割を果たしていた。サブジェクトライブラリアンは、単なる資料提供者ではなく、研究パートナーとして教員・学生と密接に連携し、研究の初期段階から資料提案や助言を行っていた。ライブラリアンへの指導に関しては、以下の 3 点が重要なポイントとして挙げられていた。

1. 研究に関連する資料を適切に収集できているか
2. 図書館の歴史や背景に関する資料が収集できているか
3. 50 年、500 年、さらには 5000 年先にも使える資料を収集できているか

これらの方針からも明らかなように、資料の保存と利用のバランスに対する高い意識と、それを支える柔軟な運用体制は、特に学ぶべき点であった。また、分野別の選書体制の確立や、将来を見据えた電子資料導入の方針なども、非常に示唆に富むものであった。

館内　　コンサベーションラボ

修繕中の資料　　貴重書（実際に手で触れることが可能）

3.ラトガース大学図書館

ラトガース大学は州立大学の上位 15 校に数えられ、学生数は約 69000 人、教員数は 9000 人を超える大規模な大学である。

今回の視察では、図書館および大学の研究・教育活動に関して、スタッフとのミーティングが実施された。大学、図書館、各研究分野に関する幅広い情報が提供され、全体を通して学問・研究・地域社会との連携を重視する姿勢が強く印象に残った。

中でも特に印象的であったのは、ラトガース大学の図書館システムにおける柔軟性と先進性である。大学全体で 11 の図書館を擁し、各キャンパスの研究や教育のニーズに応じた専門的サービスが提供されている。ライブラリアンの多くは教員資格を有し、200 名以上が在籍している。また、図書館の年間予算の 95%以上が電子リソースに充てられており、電子書籍やストリーミング資料の活用を積極的に推進している点も特筆すべき事項である。

COVID-19 以降の対応として、学習スタイルの多様化に伴うサービスの見直しが行われていた。たとえば、「ピックアップロッカー」は、24 時間 365 日資料の受け取りが可能であり、利用者の利便性と安全性の両立を実現している。また、図書館内のスペースには予約制が導入され、オンラインによる簡易な申し込みが可能である。これらのシステムは他キャンパスや部門とも連携され、空間利用の最適化が図られている。

研究支援に関しても、多角的な取り組みが展開されている。オープンアクセス（OA）の推進に注力しており、大学院生の論文を含む研究成果の公開を促進しているほか、出版社との提携を通じて APC（論文掲載料）の削減も進められている。

健康科学分野では、システマティックレビューやメタアナリシスの支援、データ管理計画（DMP）の策定支援など、専門性の高いサービスが提供されていた。

一方で、スタッフの人手不足により一部サービスの縮小が課題として挙げられており、特にレビュー支援業務の負担が大きいことから、AI 技術を活用した業務効率化が検討されている。

デジタルヒューマニティに関しても先進的な取り組みが見られ、専門ライブラリアンが教員・学生と協働し、文化資料のデジタル化やウェブ公開プロジェクトを進行中であった。また、図書館は地域住民にも開放されており、州立大学としての公共的役割も果たしている。

さらに、3 年前に設置された「デジタルラーニングコモンズ」は、学習支援と最先端技術の融合を図る施設として高い評価を得ている。ゾーンごとにカーペットの色を分けた設計、学生が自由に動かせる什器、ポッドキャスト収録用のテックスペース、プレゼン練習用のピッチルームなど、創造的な学びを支える空間設計がなされていた。

学術支援にとどまらず、学生・教職員・地域住民の誰もがアクセスできる「知のハブ」として、実質的かつ象徴的な機能を果たしていることが確認された。

オーディオブース

ワンボタンスタジオ

ピッチルーム

4.ニューヨーク公共図書館（New York Public Library：NYPL）

ニューヨーク公共図書館は、1895 年にアスター図書館、レノックス図書館、この 2 つの民間図書館をティルデン財団が統合して設立され、1911 年に本館が開館した。芸術性と機能性を兼ね備えた建築物としても高く評価されており、とりわけ白い大理石で構成された Astor Hall は、美術的価値の高い空間として知られている。

館内で特に著名な施設が、3 階に位置する「Rose Main Reading Room」である。この部屋は、ニューヨーク市の喧騒から離れた静かな空間として設計されており、通常は調査や学習目的の利用に限られているが、無料の館内ツアーに参加することで内部を見学することが可能である。

さらに、貴重書・絵画・彫刻・写真・映像など、多岐にわたる歴史的資料を展示する特別展示室「TREASURES」があり、権利章典（Bill of Rights）の原本や、くまのプーさんのモデルとなった人形など、非常に貴重な資料を直接見ることができる。

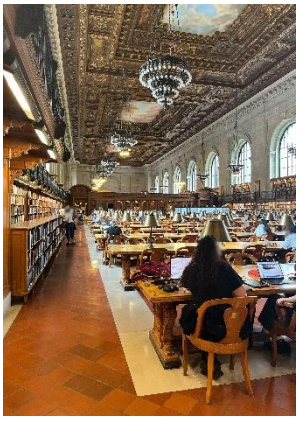
図書館見学後に実施されたミーティングでは、各部門の担当者との質疑応答の時間が設けられた。若年層の利用促進に関する質問に対しては、ティーン層に向けた情報発信を SNS を通じて積極的に行っており、アウトリーチ活動に注力しているとの説明があった。また、大学には各校専用の図書館があるものの、ニューヨーク公共図書館の充実した蔵書や快適な空間が支持されており、特に夏季休暇中には学生の自習や交流の場として活用されているという。そのため、学生が気軽に訪れやすい環境づくりやサービスの提供に力を入れているとのことであった。

施設の美観維持に関しては、専任の修繕スタッフが常駐しており、傷んだ家具や内装の補修を行う際には、補修箇所が目立たないよう細心の注意が払われている。特に経年劣化した椅子や机などについては、専門業者に依頼してレプリカを作成することで、外観を保ちつつ機能を維持する工夫がなされている。

AI の活用については、現時点では導入段階であるものの、膨大なアーカイブ資料の整理や検索補助を目的とした活用が構想されている。例えば、「手紙」としかラベリングされていない資料について、AI を用いて内容を判別・データベース化することにより、研究者への情報提供がより効率的になることが期待されている。一方で、実用化に向けては、技術面および人的体制の整備が必要であり、導入には一定の時間を要するとの見解も示された。

外観

Astor Holl


Rose Main Reading Room

5.スタブロス・ニアルコス財団図書館（Stavros Niarchos Foundation Library：SNFL）

スタブロス・ニアルコス財団図書館は、ニューヨーク公共図書館の分館の中で、最も大きな貸出可能な施設として知られている。現在の建物は約 3 年にわたる改築期間を経て、2021 年夏に新たに開館し、2025 年現在でちょうど開館から 5 年を迎えている。

この建物は 1915 年に百貨店として建設され、1970 年代より図書館として活用されてきた。100 年以上にわたり使用されてきたが、老朽化が進み、現代の利用ニーズに適合しない構造的課題が顕在化したため、2017 年に一時閉館し、全面的な改築が行われた。

蔵書数が豊富であり、年間の来館者数は約 120 万人にのぼる。改築前の館内は 6 段の高い書架が並び、暗く狭い印象があったが、改築後は低い棚とオープンな空間の導入により、明るく開放的な環境が実現された。ただし、その分収納力はやや低下しており、それを補うためにノンフィクション資料は中 1 階・中 2 階・中 3 階などの中間階に配置される工夫がなされている。

地下の旧保管庫は、ティーンおよび子ども向けの専用フロアに改装され、スタジオ、メディアラボ、3D プリンターなどの設備が整備された。特に子ども向け書籍の貸出は、全体の約 3 割を占めており、高い利用ニーズがうかがえる。

4 階には多言語資料が集約され、公共空間のあり方が再定義されている。5 階には、もともと別館にあった機能を統合したビジネスセンターが設置され、6 階では教育プログラム、パソコン利用支援、就職支援なども行われている。これにより、本の貸出機能にとどまらず、学習・就業支援など地域住民の多様なニーズに対応する多機能型図書館としての役割を果たしている。

さらに、新設された 7 階には屋上テラスと約 120 人を収容可能なイベントスペースが設けられた。このテラスは誰でも無料で利用可能であり、ニューヨーク市内で自由に使用できる公共テラスはわずか 3 か所しか存在しないという。イベントスペースでは、著者イベントに加え、ハロウィンのコスチュームパーティ、卒業式、アメリカ帰化セレモニーなど、図書館機能を超えた多彩なイベントが実施され、地域コミュニティの交流拠点として活用されている。

なお、空調機器はすべて屋上に移設されており、これにより建物内部の空間利用効率が向上している。屋上の屋根は近隣の彫刻との調和を考慮し、薄緑色に塗装されており、景観への配慮もなされている。

外観

書架

屋上テラス

6.ハンターズ・ポイント図書館

クイーンズ地区は多様な移民が居住する地域であり、クイーンズ公共図書館では多言語対応を強化している。書籍は多様な言語で揃えられており、「我々はあなたの言葉を話します（We speak your language）」をモットーに、さまざまな言語に対応可能なスタッフを配置している。対応できない言語については、外部の通訳サービスと連携し、電話を通じてさらに多言語に対応できる体制が整えられている。

クイーンズ公共図書館の分館であるハンターズ・ポイント図書館は 2019 年に開館した。美しい外観と優れた眺望で注目を集める一方、設計上の問題も多く、開館からわずか 1 週間で障害者法（ADA）に関連する訴訟が起こるなど、課題を抱えたスタートとなった。館内の特徴として、5 階をティーン向け専用スペースとしており、景観の良い空間を若年層に提供している。この取り組みは、利用者層の多様化と若年層の利用促進を意識したものである。また、ハンターズ・ポイント図書館はクイーンズ地区最大規模のマンガコレクションを保有しており、選書はライブラリアンを中心に、リクエストや利用者・スタッフの意見をもとに厳選されている。

しかし、設計と実運用との乖離が各所で見受けられた。特にアクセシビリティや安全面における問題が顕著であり、例えば当初手すりのみだった階段には、安全性の懸念から開館直前にガラスパネルが追加された。これは、図書館職員が 5 階から水のペットボトルを落とし、建築家に危険性を実感させたという事例であったからである。加えて、屋上テラスは安全性と法的制約から現在も利用不可となっている。

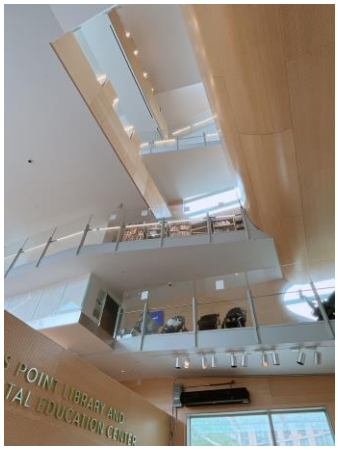
各階の構成も特色がある。4 階には当初 PC が設置されていたが、利用者の多くが自前の端末を所有しているため、現在はフリースペースとして活用されている。3 階は大人向け資料が中心で多言語ノンフィクションが揃うが、吹き抜け構造により音が反響しやすく、静音性に課題がある。予定していた音響対策素材は予算の都合で導入が見送られた。

2 階では子ども向けと大人向けのエリアが共存しているが、通路が狭くベビーカーの乗り

入れが困難であるほか、子ども向けスペースに接する階段には安全上の問題があり、使用が制限されている。

全体を通じて、ハンターズ・ポイント図書館は先進的な設備と意欲的な設計を備えているものの、実際の運営面ではアクセシビリティや安全性、利用者の利便性との間に多くの課題を抱えている。こうした中でも、スタッフは利用者対応に真摯に取り組み、改善に努めている点が印象的であった。

安全性を考慮し、手すりだけでなく、ガラスパネルが追加された。



吹き抜けによって見栄えは良くなったが、床面積が減少し、書架を置くスペースも限られた。

7. アメリカ図書館協会（ALA）年次総会（特別セッション）

ALA は世界で最も歴史があり、かつ最大級の図書館協会である。ALA では毎年 6 月に年次総会が開催されており、本年はペンシルベニア州フィラデルフィアのコンベンションセンターを会場として、6 月 26 日から 30 日までの日程で実施された。

年次総会には、世界中の図書館関係者（図書館員、職員、教員、作家、出版社、企業出展者など）が一堂に会し、利用者サービスや著作権問題をはじめとする多様なテーマを扱ったフォーラム・セッションが開催された。また、会場内では多数の企業による大規模な展示会も行われ、情報交換や議論の場として活発に機能していた。出展ブースの一部では著者によるサイン会も開催され、長蛇の列ができる場面も見られた。

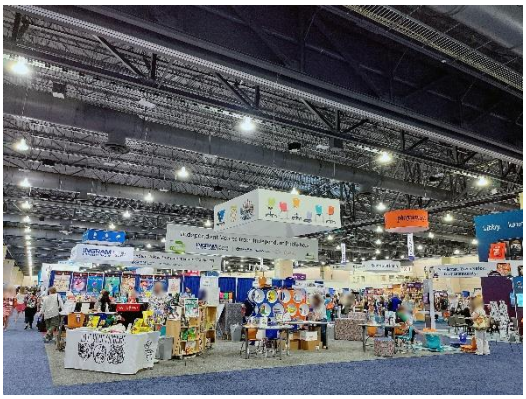
年次総会終了後には、メディアリテラシーおよび AI を中心とした教育・図書館分野に関する最新動向を共有する特別セッションが実施された。セッションでは、教育機関および図書館におけるメディアリテラシー教育の現状、ならびに AI ツールの活用事例について幅広く紹介がなされた。

特に、学生がすでに日常的に AI ツールを使用しているという実態を踏まえ、教育現場において教員や図書館員がどのようにその使用を指導すべきかが大きなテーマとして取り上げられていた。生成 AI（とりわけ ChatGPT など）の活用に関しては「どのようなプロンプ

ト（入力内容）を与えるか」によって出力される情報の質が大きく変化することから、学生には具体的かつ的確な指示を出す力を育成する必要があると指摘された。

また、図書館の実践例として、LibGuides を活用し、適切な情報探索の手順や信頼性の見極め方を提示する取り組みが紹介された。図書館員は、学生へのレファレンス対応やユーザーサポートを行うのみならず、教員や他の図書館職員を対象としたトレーニングも実施しており、教材を外部から購入するのではなく、自ら教育コンテンツやウェブサイトを開発する先進的な事例も報告された。

このように、図書館員が教員や学生に対して教育的役割を果たす場面は今後さらに増加すると見込まれており、それに伴い図書館員自身のスキル向上と教育機関との連携が一層重要になることが示唆された。加えて、学生が AI に安易に依存するのではなく、主体的に情報を選択・活用できる能力を育成するためには、単なるツール利用に留まらず、適切なプロンプト設計や批判的思考を促す指導体制の整備が急務であると感じられた。



アメリカ図書館協会（ALA）年次総会 会場の様子

Ⅳ.おわりに

AI の活用に関して、慎重な立場を取る機関もあれば、積極的に導入を進める動きも見られ、各館の多様な見解を知る貴重な機会となった。また、図書館における空間設計や柔軟なスペース運用、利用者ニーズの把握といった「場所」としての在り方についても多くの示唆を得た。大学図書館と公共図書館それぞれの長所・短所を比較し再認識することができた本研修は、今後の業務に大きく活かせる有意義な学びの機会であった。

＊本報告書の写真はすべて報告者撮影による。